

聖書：ローマ5：1～4

説教題：患難さえも喜ぶ

日時：2015年7月26日

ローマ書はこの5章から新しい区分に入ります。これまでの1～4章では「信仰義認」の教理について語られました。まず初めに神の恵みなしでは人間はどんな状態にあるのかについて語られ、その結論として3章19～20節で「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するため」と言われました。しかしそんな望みのない者たちに、神はイエス・キリストを信じる信仰による義を与えてくださると言うことが続いて言われました。パウロはそれは旧約時代から示されて来たメッセージであることを、4章で特に信仰の父アブラハムの記事を通して示しました。こうして今日の5章へと入って来ます。この5～8章にかけてパウロが語ることは何でしょうか。それは信仰義認から流れ出る様々な祝福についてです。キリスト教信仰とは、イエス・キリストを信じて神の前に義と認められて、それで終わりではないのです。それはその後続くもろもろの祝福の始まりにしか過ぎないのです。

1節：「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」パウロが述べている一つ目のことは「神との平和」です。平和とは何でしょうか。多くの方はまず消極的な意味を考えるといます。すなわち戦争がないこと、争いがないこと。私たちはかつて罪の状態にあった時は、神の怒りの下にあったと1章18節で言われていました。ゴキブリが台所の裏からノコノコ出ていったら人間の怒りを買わずにいられないと同様、私たちもかつてはそのままでは到底、神の前に出て行けるような者ではありませんでした。平和の関係がないのですから、いつさばかれるかと怯え、逃げ隠れる生活しかできませんでした。そして逃げ隠れることができるのはわずかの期間であって、やがて必ずさばきを身に受けざるを得ない者たちでした。しかしイエス・キリストを信じて義と認められているなら、今や神の御怒りは過ぎ去り、私たちは神との平和を頂いています！そしてこの平和は神との正しい関係から来るあらゆる積極的的祝福をも意味します。ユダヤ人は挨拶する時に「シャローム」「平和がありますように」と祈りましたが、これは「神の満ち満ちた祝福があなたにありますように！」というものでした。すべての祝福の源なる神と平和の関係にあるのですから、神はご自身が持てるすべての良きものを惜しみなく私たちに分け与えてくださるのです。8章32節：「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」私たちはこういう平

和の關係に導かれていることを喜んで、今やビクビク神を恐れることなく、むしろ大胆に神に近づき、交わって歩むことができる者とされているのです。

パウロが述べている二つ目の祝福が2節に記されています。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」ここに「神の栄光を望んで大いに喜ぶ」とあります。この「神の栄光」とは何でしょうか。普通私たちが「神の栄光」と言う時、神ご自身が放たれる栄光を考えるのではないのでしょうか。確かに私たちは将来、神ご自身の栄光を今以上に知る者となります。地上では神を直接見ることはできません。「人は神を見て、なお生きていることはできない」と言われています。しかしやがての天の御国では、神を直接仰ぎ見ると言われています。私たちはその日までに整えられて、神を直接見ても大丈夫なほどの者に造り変えられて、神の栄光を初めてのようにして仰ぎ見るのです。また父なる神だけでなく、御子キリストの栄光も私たちはかの日にはつきり見ます。私たちのところに身を低くして入って来られ、十字架と復活を経て栄光の天に入られたイエス様がどんなに聖なる方であり、麗しく、栄光に富んだ方であるか、私たちはまだ見ていません。やがての日に私たちは顔と顔を合わせるようにして栄光の主と相まみえるのです。

しかしこのローマ書5章2節の「神の栄光」はそういう意味ではありません。3章23節でも見ましたが、これは私たち自身があずかる神の栄光のことです。私たちは将来、私たちとは別に神が栄光に輝く姿を見ることを待ち望んで喜ぶというのではなく、この自分自身が神ご自身を映し出す栄光の状態に導かれることを望み見て大いに喜ぶのです。8章30節：「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」ちなみに口語訳聖書は「神の栄光にあずかる希望を持って喜んで」、新共同訳聖書は「神の栄光にあずかる希望を誇りとしています」と訳しています。実に聖書が述べている私たちの救いのゴールとはこのようなものです。私たち人間は神のかたちに造られました。すなわち神を鏡で映し出すような存在として造られた。そして人間は神を愛し、神に信頼して従う歩みを通して益々神のかたちという特性を発展させ、その最終状態に達するようにという歩みに置かれました。しかし最初の間人間アダムとエバはその道を踏み外し、その後続くすべての人間は罪の下に生きる者となってしまいました。しかし神はご自身が立てられた最初の計画を無にはされません。罪に堕ちた私たちをイエス・キリストにあつて救い出し、この神の栄光にあずかるという最終目標に回復して行けるように導いてくださるのです。Ⅱペテロ1章4節：「神のご性質にあずかる者となる」Ⅱコリント3章18節：「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主

の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」　ピリピ3章21節：「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」　信仰による義を頂いたということは、この「神の栄光」という救いの究極目標に私たちが必ず到達させられるということを意味するのです。私たちはこのことを心から確信して、今から嬉しくて嬉しくてしょうがなくて、これを望んで私は大いに喜んでいきます！ということになるのです。

しかしです。そうは言っても、そんな将来のことなんかとても見つめられないほど、私は目の前の戦いに精一杯である。そんな約束とは矛盾するような苦しみ、悩みに囲まれていると言う人もいるかもしれません。パウロもそのことは知っていました。信仰を持てば、後はクリスチャン生活はバラ色なのではありません。むしろたくさん苦難が信仰者にも訪れます。これらをどう見るべきかについて、パウロは続けて語ります。3～4節：「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」　パウロはここで患難さえも喜ぶと言っています。患難はあるけれども幸いの方が大きいというような言い方ではありません。患難そのものを喜びとする。どういうことでしょうか。これは患難は2節で見た神の栄光という最終ゴールに達するために必要なものとして神が備えてくださったものだからということです。それはなくても良いものではなく、ぜひとも必要なものだということです。

まずパウロは「患難は忍耐を生み出し」と言います。確かに苦しみは、人によってはつぶやきや苦々しさ、怒りや絶望をもたらす場合もあるでしょう。しかし信仰者の場合はそうではありません。患難が訪れるとどうなるでしょう。困難や試練が与えられることによって、私たちは真に主に頼ることへと追いやられます。試練があるまでは、私たちはある意味であまり何も考えない生活をしています。しかし試練に会うや否や、自分は思っていたようには強くない人間だと自覚させられます。そしてそれまでとは違ったレベルで主に祈り、主に頼るように導かれ、主との生きた交わりへと追い立てられるのです。このことを経て、私たちは試練を乗り越えるための力を主から頂くのです。主によって強められ、いわば眠っていた信仰の筋肉をつけさせられます。そのことによって忍耐を培われます。すぐキレてしまわず、すぐ絶望してしまわず、主に頼って、揺り動かされない、持ちこたえる歩みへと導かれる。ですから忍耐は、患難と信仰がセットになって私たちに培われるものです。

次に「忍耐が練られた品性を生み出し」とあります。主に信頼する忍耐に生きるということは、主との交わりを通して私たちが益々主に似る者になって行くことです。

聖書において試練や患難は、私たちが精錬する働きをされると言われています。I ペテロ 1 章 7 節：「あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊い～」 試練の火の中で私たちの信仰の不純物は焼かれて取り除かれ、その信仰は純化され、一層輝きを放つように導かれます。こうして忍耐を経て練られた品性が形作られるのです。これは試験を経て合格した品性という意味です。テストされ、良しと認められた品性のことです。私たちの信仰の成長や成熟のためには、このようにどうしても患難や苦難が必要なのです。実際、苦しみを経験していない人にはほとんど人格者はいないのではないのでしょうか。そういう人は物事を簡単に、浅くしか考えていないものではないのでしょうか。しかし忍耐の道を通り、幾度も試されて来た人はそうではありません。素晴らしい人格を持っている人はたいいてい、多くの苦しみを経験して来ている人たちであるものです。

さらに「練られた品性が希望を生み出す」とあります。忍耐を経て、練られた品性を持っている人は、そうでない人に比べて益々大きな希望を持ちます。それは試練の中で、益々主に信頼する者へと導かれた結果として、当然予測される状態です。これからどんなことがあっても、これまで共にいてくださった主が最後の栄光に至るまで確実に導いてくださるということをいよいよ確信するからです。何物も私に対する神の最善の目的を妨げることはできない。8 章 38～39 節：「私はいこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、その他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」 無駄なことは一つもないのです。ただ主の恵みにより、すべてのことを通して、必ず最後の栄光へと導かれることを確信して、益々喜ぶという歩みへ導かれることになるのです。

私たちは果たして患難をこのように見ているのでしょうか。このように生きるためのカギは、信仰による義を私たちがしっかり受け止め、感謝して生きているということです。もし信仰による義にしっかり立っていないなら、困難に直面した時、私たちはどう考えるでしょう。その人は「これはきっと私に対してついにやって来た神のさばきだ」と思うかもしれません。「神は私をよく思っていらっしゃらないのだ。だから祝福してくださらないのだ。私を幸せの道から外しておられるのだ」と。そしてイライラし、神に対して苦々しい思いを持ち、絶望の底に倒れ落ちて行ってしまうかもしれません。しかしもし信仰による義を受け止め、感謝して、この恵みに立っているならどうでしょうか。私たちは患難に直面した時にこう考えます。これは私へのさばきではない。私の上にあった呪いはキリストが全部代わりに担ってくださいました。私は今や義と見なされ、神との平和を頂いている者である。だから神がその私に悪くされるは

ずがない。むしろ私には神の栄光にあずかる将来が確定している。そこに至るための育みとして、神はこの患難をくださったのだ。これによって私をふさわしくトレーニングし、磨き上げ、きよめてくださるために。これによって私は益々栄光に近づくのだから、これは大いに歓迎すべきものである！と。

世の中の人には自分が将来、どんな状態へ行き着くのか、分からないため、目の前の出来事に大きく振り回されます。しかし信仰による義に立つ人は、自分には素晴らしい最後が確実に備えられていることを知っています。神の栄光にあずかる日を待ち望んで大いに喜んでいきます。そしてこの世で起こり来ることはすべて、この目標に向かうためのものであることを知っています。そういう視点から私たちは毎日の生活に与えられる一つ一つのことを見て行きたい。たとえ患難であっても、最後の素晴らしいゴールに至らせるために神が与えてくださったものと見て、一層主に信頼し、忍耐を培われ、練られた品性を形作っていただき、希望を大きくさせられて、神の栄光を望み見ていよいよ喜ぶ歩みへ進みたいと思います。